閑谷学校 ― 現存する世界最古の庶民のための公立学校

この秋の１０月１日、２日、学祖松本生太先生に２０２９年度からの完全男女共学化の報告を申し上げようと、家内と共に先生の故郷の岡山にお墓参りに行って来ました。なかなか伺えず、昨年のお正月以来になってしまっていました。

岡山に行くたびに、以前から一度訪ねてみたいと思っていた場所があって、そこは閑谷学校。備前岡山藩を治めた池田光政が池田家に相応しい墓所選びに和気郡木谷村、後の閑谷村に立ち寄り、その風光明媚な景観に感じ入り、「山水清閑、宜しく読書講学すべき地」、ここはゆくゆく学校を建てるべき所と命じたことが発端と言われます。江戸時代前期（西暦１６７０年）に庶民のために開かれた、現存する世界最古の公立学校とか。因みに、この辺りの「和気」は、皇統を守り、桓武天皇の信任篤く、平安京遷都に尽力、殊に子どもの教育にも熱心であった和気清麻呂の生地です。

訪ねるまでは、平野の奥の山裾にでもあるのだろうと想像していましたが、何の何の深山幽谷と言ってもそう誇張ではない場所に先ずびっくりしました。先生も生徒も、こんな山奥に通ったり、寄宿したりしていたとは。

前景に堀を配し、両端に鯱鉾が飾られた中央の屋根と左右に小ぶりの袖屋根を被せた校門、そこから学校のぐるりを数百メートルにわたって緻密に積んだ蒲鉾型の石塀、その向こうに備前焼の渋い赤茶の瓦で葺いた端正な建物が緑の芝生に配置されていました。正面奥の小高い丘に光政公を祀る神社と、この学校の教育の中核を成した儒学の祖孔子を称える聖廟、前に構えるのは「学問の木」と呼ばれる大きく育った２本の楷の木。中国山東省にある孔子の墓所で採取された種が持ち帰られ、発芽に成功した中の２本で、お茶の水の湯島聖堂※のものも同じ由来のものだそうな。

大船キャンパスの東山庭園にも「学問の木」がありますが、これは、その木陰で医学の父ヒポクラテスが弟子達に医の知識や技術や倫理を教えたというプラタナスを、学園の発展にご尽力下さった、私にとって公私にわたる恩人である元常務理事・学長特任補佐の故髙城義太郎先生の亡き初子夫人が寄贈して下さったものです。

先生方に引率された小学校４年生の児童一行が資料を片手にあちらの建物、こちらの建物と駆け回っておりましたが、他にはほとんど人とてなく私達だけ、みんな元気よく「こんにちは！」と挨拶してくれて。資料館を見学して表に出て来ると、この学校最大の建物である講堂で論語の授業を受けていました。国宝を使っての授業なんて、何と素敵なこと。しばらく外からそ～っと眺めていると、拭漆をかけ、鏡のように磨き上げられた板の間に敷かれた藁を丸く編み込んだ座布団に先生も子供達も正座し、皆が白い紙を開き、先生に続い

て大きな声で『論語』の一節を読み上げていました。「子曰(しいわ)く、己(おのれ)の欲(ほっ)せざる所は人に施(ほどこ)すこと勿(なか)れ」。その訳(わけ)を先生が問い、その訳を児童が答えます。昔は全国津々浦々でこのような授業が行われていたのでしょう。

日本人は、飛鳥・奈良の時代から誠に教育熱心な国民、この閑谷学校の創設の発願(ほつがん)といい、プロモーションビデオによれば「未来の子供達のために」良い物を作ろうと細部にまで丹精込めた石塀や建物といい、無論その内実を成す立派な教育といい、ここにも日本人の心がよく現れているものだと、今更ながら感心しました。江戸時代の教育水準の高さを逸早(いちはや)く指摘したのは、若い頃から日本学で名を成したロンドン大学のロナルド・ドーア博士でしたが、こうした教育の歴史があったからこそ、日本は明治維新も、近代化も果たし得たのだと私は確信しています。「百年を思う者は人を育てる」、生太先生も、こうした自然風土・精神風土の中で育たれたのでしょう。

※湯島聖堂とは、五代将軍徳川綱吉が学問振興のためにお茶の水に建立した孔子廟。江戸時代は、ここに幕府直轄の「昌平坂学問所」が置かれていた。

＞前のページへ戻る